

読 解 4

小宮 修太郎

Reading Comprehension 4

KOMIYA Shutaro

はじめに

このクラスでは、中級レベルの学習者を対象として、新聞、雑誌、短編小説などの生の日本語文章を教材にして読解練習を行っている。レベルが中級の半ばであるため、一般的な読解能力を総合的に伸ばしていくことを中心目的としている。その中で、とくに文章理解力の発達のために重要な意味を持つものとして、読解ストラテジーの習得に重点を置いている。また、その習得のための速読型練習を行うにあたっては、クラス全体での口頭のインタラクションを前後に入れるようにしている。全員のストラテジー習得への方向付けや、その定着のためにも効果的だと思うからである。

1. クラス規模と属性別構成

受講者の人数は、各学期の平均で約20名である。学期ごとの変動はあるが、近年は15, 6名から、23, 4名までの範囲で推移しており、人数の面ではかなり安定していると言える。

所属別構成では、学部生・大学院生・研究生・短期留学生・教員研修生などに分かれている。このクラスの最近の傾向としては、大学院の研究生の割合が増えていることがあげられる。2003年1学期は23名中9名、2学期は24名中10名と、いずれも約4割を占めている。

国籍別には、中国人留学生が大きな割合を占めている。これは他のクラスでも、同様かと思われる。欧米系では、スロベニア人留学生が毎学期3, 4名参加している。その他、様々な国籍の留学生が含まれている。

2. 主な目的と、教材作成・教室活動のねらい

補講コース全体の中で位置づけると、読解4の中心的な目的は、学習者の読解能力を中級から上級レベルへと高めていくために、その中間的過程として一定の役割を果たすことであると考えられる。そのことを意識した上で、このコースでは、次のような目的を設定している。

- ① 新聞、雑誌など、実際の日本語の文章を読むのに慣れること。
- ② 新聞記事、エッセイ、小説など、いろいろな種類の文章を読んで、その特徴を知ること。

③ 書き言葉の文法や、単語、慣用句、表現などを学習すること。

④ 速読や、精読の練習によって、文章を読む能力を高めること。

このレベルの学習者は、基本的にはまだ教科書中心の学習を続けており、生の日本語の文章を読む経験は不足していることが多いと思われるので、①や②の目的を設定しようと考えた。同時に、これらの領域で教材を選ぶことにより、内容面での面白さを高めたり、学習者の日本事情への関心に応えることもできると考えた。

一方、③や④は、読解能力を総合的に高めていくことをめざしたものである。その中で、特に重視しているのは、速読的練習を軸にすることによって、読解ストラテジーの発達を促すことである。それは、文章理解力の発達のためには読解ストラテジーの習得が重要な意味を持つと考えるからである。ただ、クラスのレベルを考えて、このコースでは、学習内容を基礎的な読解ストラテジーの範囲に限定している。

また、そうした読解ストラテジーの習得のためには、クラス全体で問題を考えさせたり、話し合わせたりすることが有効であると考え、それらの教室活動と結びつけながら速読練習を行っている。それは、1つは、全員で考え、話すプロセスの中で、こういう練習に不慣れた学生たちも、その思考作業に方向付け、誘導していくことができると考えるからである。

また、もう1つは、話し合う過程、試行錯誤の過程があることによって、読解ストラテジーを使う思考作業が印象に残るものとなり、定着しやすくなると思われる。他方、授業形式という面から見ると、それを参加型に近づけ、活性化するのにも役立つものだと感じている。このように、いくつかの利点が期待されるわけである。

3. 内容と方法

10週10コマ分を、4つに分けて、①小説、②新聞投書、③新聞記事、④雑誌エッセイを教材とする読解練習を行っている。具体的に方法を示すため、①と③については、詳しく説明してみたい。

【小説の場合】

1課では、SFショート・ショートに分類される小説を教材にしている。ショート・ショートを選んだのは、文章全体を扱うことができると、ユーモアや意外性など面白さのポイントがわかりやすいことによる。

1コマ目では、読む前に、まず小説の内容に関連した話題で話し合ってみることから始める。これは、読み手が持つスキーマを喚起したり、主題を予測させたりする上で、プラスの効果があると思うからである。次に、本文の最初の部分の読み合わせをする。学生からの質問を受け、教師から口頭の質問もする。練習問題は、教材となる作品ごとに変えているが、「なぞのロボット」(星新一)であれば、主題の予測と、ロボットの働きは何かをグループで話し合うことなど。次に、第2の部分を読む。練習は、この部分に出てくる情報を表に整

理すること、もう一度話し合うこと、次の展開を予想することなど。

宿題は、毎週出すようにしている。この回は、練習問題で終わっていないところを書いてくこと、次の週に読む部分の単語リストの中で、知らない単語を調べてくることである。

2コマ目では、第3の部分を読む。予測が当たったかどうか確認する。ここは、起承転結の「転」にあたる部分なので、部分的に当たっていても、やはり、意外性を含んでいる。それで、ここまで読んだ段階での気持ちを書かせた後、第2の部分と同様の練習を行う。結末を予測させるのだが、これはヒントも与えつつ行う。最後に第4の部分を読む。ここは、「結」の部分でさらに意外性がある。同時に、話のオチの面白さや、ユーモアも感じられるところである。それで、口頭で要点を質問するとともに、練習問題では、内容確認の質問への答や、この小説を読んだ感想を書かせている。

以上の他に、精読的な面についてもふれておく。教材が小説であるため、文法・表記・単語・表現の各側面にわたって質問が出てくる。それに対しては、中級の学習者が知っているはずのことをベースにして、学習者にもある程度考えさせながら、説明していくことが多い。

この種の小説には、あまり難解なことは含まれていないので、説明もしやすく、上記の各側面の知識・理解を深めていくのに役に立つと感じることが多い。その意味で、生の文章を読むことに慣れていくためには、適当な教材であると感じている。

【新聞記事の場合】

社会面の記事で、ある程度長く、内容も面白いものを選んで、教材にしている。新聞記事の構成についても学習させるため、前文が付いているものを選んで読む。読む中で、見出しや前文にも焦点を当てるが、これは読解ストラテジー行使の手がかりと具体例になると考えるからである。

1コマ目では、「読む前に」の話し合いをすることから始める。次に「見出しを読む」で、2つの練習をする。1つは、見出しを読んで、その意味を考えること。もう1つは、見出しから記事の内容を予測すること。いずれも、クラス全体でいっしょに考えさせている。次に、「記事の前文を読む」ことに入る。ここでは、質問・応答の後、主な情報を短文でメモさせたり、主語のない文の主語を考えさせたりして、速読・精読の練習をする。さらに、「本文」の最初の部分を読む。ここでは、各段落の要点をメモしてから、部分の主な内容をさらに短くまとめてメモさせる練習などを行う。この作業は記事本文の終わりまで続くのであるが、そこには2つの意図がある。1つは、各部分の内容をかんたんにまとめながら、全体を見ていく読み方を練習させること、もう1つは、後で前文の内容と、本文全体の内容を比較させて、前文の持つ役割を具体的に理解させるための準備である。

2コマ目では、「本文」の後半を同様にして読んでいく。それと同時に、省略のある文をわかりやすく説明させたり、主題との関連で重要な文について各人の考えを求めたりして、精読・速読の練習を行う。最後に、まとめとして、記事全体についての感想を口頭と文章で

表現させたり、記事の前文と本文の内容を比較させたりしている。

この課でも、宿題として、練習問題の残りと言語の予習を課題にしている。漢字圏の学生と非漢字圏の学生とでは、言語の意味把握にかかる時間に大きな差が見られるので、それへの対策としても、言語の予習はさせる必要があると感じている。

学生からの質問では、特別な言語や外来語、省略のある文についてのものなどが多く出される。やはり、新聞記事の文章の特性に対応した困難点は、これらの面にあるようだ。また、見出しの省略された要素を正しく補うのも時間のかかる作業になっている。

4. 主な成果と問題点

中心目的とした、「読解能力を総合的に伸ばす」という視点から見て、どのような成果が上がっているのかを考えてみたい。

1つは、「主題をつかむ」、「部分の要点をつかむ」、「予測する」といった読解ストラテジーの習得が進んだと思われることである。その根拠の1つは、期末テストの結果で主題や部分の要点をつかむ問題への正答率が高いことである。これは、たとえば第2課などの練習の中の結果と比較すると進歩が感じられる。2つ目は、第4課で予測の練習をすると、かなりの人が正しくできて、それも手がかりをつかんで予測しているのが分かるからである。また、テスト問題の要約文の結果を見ると、学習者によっては、「文章の構成をつかむ」こともできるようになっているのが分かる。

もう1つは、「生の文章を読むことに慣れる」という点でも、進歩が見えることである。これは、第4課が雑誌のエッセイで難易度が上がっているにもかかわらず、読み進める様子や、練習の答の出し方を見ると、多くの学習者がそのレベルに対応できているのがわかることによる。また、出発点と比べて、文法面の質問が減少してくるという変化も見られた。いろいろな面で、自分で処理・解決する能力が伸びていて、生の文章が読みやすくなっているためであると思われる。

問題点として感じているのは、出発点でレベルが低かった学習者の伸びが十分ではないことである。前述のように、読解ストラテジーについては口頭のインタラクションで全員を習得に導くようにしている。その他の面では、いろいろな形で、個別の指導が行われるように工夫している。しかしながら、1人か2人の学習者は、期末テストの得点がかなり低い結果に終わっていることが多い。したがって、この点については、さらに原因の分析と指導の仕方の工夫を進めていきたいと思っている。